

乳幼児の言葉の発達と絵本

古相 正美

Picture Book and Development of Child's Language

Masami Furuso

1. はじめに

江戸文学を生業としてきたはずの私が、いつのまにか教育の世界にどっぷりとつかり、気付くと幼児教育の専門家のような顔をし出している。人生の曲折の面白さを感じるが、これが現在の日本の大学の置かれた環境の厳しさであろう。文学という虚学をのうのうと生き延びさせてくれるような余裕は、今の日本にはないのかもしれない。教育という世界の中に国語・言葉という範疇が残され、次世代の育成に携われることを幸せと感じるべきなのだろう。

現在、保育の世界は、待機児童の減少という政治政策のために、幼保一元化という荒波にもまれている。学んでいる学生が不安を感じるほどの大波である。どういった形に帰着するのか全く予測のつかない現状なのだが、私個人としては、あまりたいした問題ではないと考えている。我々は保育者を養成すればよいのである。それも、子ども達の発達を理解し、適切な支援を行うことのできる保育者を。むろん、無上の愛に支えられて。そんな思いで子どもを見つめ、学生を指導している。

人間は誕生の瞬間から言語の獲得を始める。胎内において学習が始まっているという考え方もあるが、ここでは胎内記憶に関する検討は外しておく(注①)。人間の学習の起源を誕生の瞬間と考え、そこから言語の発達が始まるとしたい。新生児期から始まるコミュニケーション能力の発達、そこに言語発達の始点を見出し、一歳前後の初語出現、二歳前後の爆発的語彙増加、三歳から五歳における話し言葉の確立、六歳からの書き言葉の導入へと続く発達段階を追いながら考察していくことが肝要だと考えてい

る。

本論は、そうした発達について、各年齢における保育指導の注意点を整理し、各時期の絵本の利用方法を検討するための先駆けとなる研究ノートである。科学的検討に関してはまだまだ不十分な点が多いのだが、保育内容言葉や人間発達論Ⅰ(言語)の授業や保育者への講習、そして保育者との共同研究をもとに、集団保育という枠の中における言語発達と支援、絵本の利用といった事柄についての覚え書きを記し、今後の研究の始点としたい。なお、言語発達については数多くの先行研究があるが、中でも旧保育所保育指針と「保育場面に即した言語発達評価と支援」(瓜生淑子『言語発達とその支援』シリーズ臨床発達心理学4 ミネルヴァ書房2002年)を参考にした。

2. 0歳—ヒアリング期

ヒトは世界中のどの言語でも話すことができる能力を有して、この世に誕生してくる。そして、生後3年間くらいで母語を獲得する。母語は環境によって決定される。チョムスキー・スキナー・ピアジェ以来、言葉の獲得が生得的なものなのか環境的なものなのかという議論は多くあるが(注②)、未だに決定的な論は出ていない(注③)。ただ、生まれた瞬間から視覚・聴覚ともに働いていることは、近年の研究によっても明らかである。生後すぐの模倣行動としては「統制された実験的研究によると、早い例で生後42分から71時間(平均32.1時齢)の新生児が、おとなの舌出しと口の開閉を真似たという(Meltzoff & Moore 1983)」(注④)、授乳実験における母親の聞き分け行動など(注⑤)もあり、間違いなく、子供は誕生時から学習を

開始している。赤ちゃんに関する研究は、霊長類研究者や工学部研究者の参入・赤ちゃん学会の発足などにより劇的に進んでいると言ってよい。ここ二十年間で赤ちゃんの能力についての常識がすっかり変わってしまっている(注⑥)。人間は動物と比べて極めて未発達で生まれてくるという物言いから、すでに五感を供え、様々な行動も可能であり、しかも歩くという能力も先天的に持った形で生まれてくる。つまり、かなり完成された、あるいは完成されるべき可能性を秘めて生まれてくると言われるようになった。

そうした発達の中でも、言語の獲得はヒアリングから始まる。そこには、まだ文字言語はない。音声言語の世界の学習はヒアリングからである。ヒアリングが一応完成してからスピーキングが始まる。ヒアリングの完成時期については、認識言語ができているかどうかという実験が困難であるため、文献により相違がある。ベテラン保育士の経験則というのも、こういった事柄については無視できないものがある。言語の発達は知的発達であるため、当然のことながら個体差が大きく、一般的にといいながら、かなりの個体差が含まれることになる。例えば、初語は一歳前後とはいいいながら、一般的な子どもでも十ヵ月から一歳六ヶ月とかなりの幅が生じることとなる(むろん、初語の認定に伴う諸々の問題も含まれるが)。したがって、医学や発達心理学の世界では、様々な発達段階について何歳何ヵ月と特定してあるが、そこにはかなりの無理があり、そのために検診における無思慮な経過観察という言葉が生じるように思われる。

専門家からは叱責を受けるかもしれないが、多くの保育士との学習の結果として、認識言語、大人の言うことがなんとなく分かるようになるのは三ヵ月程度だと思われるし、半年すれば、ほぼ認識できているようである。幼児は喃語を数ヶ月で発するようになるのだが、これもまたジャルゴンになる以前でも、もしかすると

話しているつもりなのかもしれない。まだ口腔と舌の使用に慣れていないために言語と認識されていないだけで、ヒアリングの完成とともに話しているつもり言語が、スピーキングの上達とともに大人から言語と認識されるようになるのである。そうした言語が初語と認識されるのだが、これは確かに保護者の場合には早い時期の認識となり、それ以外の客観的な保育者などだと遅い時期の認識となるだろう。

ただ、初語について思うことは、食物を意味する「マンマ」が日本の場合だけに初語となるのはおかしいという認識があるようだが(注⑦)、はたしてそうだろうか。それは言語の違いで、食物全体を意味する言語が欧米語にないからではないだろうか。食物は生きる基本であり、いつも聞く言葉である。これが初語であることには、何の問題もない。しかも幼児の最初の発音である mpb の口唇音である。またもう一つ。「ママ」お母さんが初語の上位に来ることには疑問はないのだが、日本で「ママ」が定着するのは戦後50年代以降であり、それ以前は「かあちゃん」「おっかあ」などであったはずで、幼児の発音しやすいものではなかった。つまり、その頃は初語の上位には入っていなかったはずである。変わり方は「ババ」であり「ジジ」だっただろう。昔話でも、主要な登場人物は両親ではなく祖父母である。子育ては労働力として戦力外となった祖父母だったのではなかろうかという推測が成り立つと思う。

閑話休題。ではヒアリングは、どのような形でいいのかということとそういうわけではない。やはりコミュニケーションによるものでないと、言葉の獲得にはつながらない。これについても実験はできないのだが、近年急増している虐待の実例がその反証になるようである。幼い頃から養育者に言葉かけの不足している虐待を受けた子どもたちには、言語の獲得が遅れている傾向が見られる。養護施設においての大きな問題の一つとなっている。幼児の頃に英語のテープをずっと聞かせ続けた子どもが、決して

英語を話すようにはならないということも同様の例と言える。幼児が言語を獲得するには直接的なコミュニケーションが必要なのである。言葉を発しない赤ちゃんの場合、それは動作であり泣声である。赤ちゃんが何らかの動作や発声を行なうと、養育者は必ず何らかの行動を行なう、その多くは言葉掛けとなる。(大きな意味でのマザリーズである)それがコミュニケーションだといえる。そしてまた、第一子の初語は第二子以降よりも早いという調査結果も出ている(注⑧)。これも、コミュニケーションの大切さを物語っている。第一子は、言葉掛けの量が確実に多い。他の子どもの養育を伴わないだけ、第一子への言葉掛けは多くなるのである。そうしたコミュニケーションが言語の獲得に重要な意味を持っている。

そのように考えれば、集団保育の0歳に必要なことは、できうる限りの言葉掛けだと言える。そうして、そのために役立てることができるのが絵本なのである。0才児の読み聞かせ、これがコミュニケーションになる。そもそも絵本の読み聞かせが何歳から可能なのかという問題がある。これについても、さまざまな本に様々な記述されているが、六ヶ月と書かれたり十ヶ月と書かれたり様々である。子どもが絵本の読み聞かせを理解し始める時期は推定できないが、絵本を見はじめる時期については、自分の子どもで実験してみた。一番早い子で、一ヶ月。新生児期は目を開いて機嫌の良い時間が極めて短く、なかなか実験するには至らないが、その時期を過ぎると実験は可能で、明らかに特定のページを注視することがわかった。一冊の本全てを注視することはないが、何度繰り返しても、同じページを注視する傾向が見られた。しかも、絵本の種類は問わないが、中間色のものは注視することはないが、原色のページを注視する傾向があった。0才児の読み聞かせでお薦めするのはミッフィー、うさこちゃんである。ブルーナー絵本のいわゆるブルーナ色、中でも赤と黄色のページはじっと見る傾向が強かった。

0歳の子どもには、物語性はまだ必要ない。見やすく、語りかけやすい絵本を選ぶことが大切だ。どんな絵本でも興味を示すわけではないので、その子の興味を示す絵本を探すことも大切だと言える。二三冊絵本を見せて見ないからといって、「この子は絵本には興味がないのだ」などと早計に判断してはいけない。この時期の絵本は赤ちゃん絵本といわれ、一般の書店には置いてあるが、図書館には設置されていない場合が多い。以下、ここで具体的な絵本をあげる場合は、一般家庭での育児ではなく集団保育を前提とする。

コミュニケーションという観点から言えば、読み聞かせは、絵本を媒介とするコミュニケーションだと言える。同じものを注視しながら、耳から声が聞こえる。これは一方的な刺激の強いテレビの世界とは全く違った、双方向のコミュニケーションだと言える。保育園に来る子どもは一般的には三ヶ月齢以上であり、それまでは母子で育つのが一般的であり、しかも、その三ヶ月が産後うつと言われ、虐待のおこりやすい時期でもある。この育児不安の時期に、絵本を役立てることができる。保育者と違い、一般の母親は応答のない乳児に対して言葉掛けをすることになれていない。言葉掛けが必要だと言われても、疲れ果てた育児の中、初めてという不安の中で、そのような事が普通にできるはずがない。そのような時に、絵本を開いて、赤ちゃんが時折目を向けるような絵本を開いて、何でもいいからお話をしてあげる、いや書いてある通りに読んでもいいし、書いてある通りでなく、自分の心情を声に出して語ってもいい。絵本の絵を見るだけでも、きっと母親の心は癒されていくはずだし、声に出すことによって、ストレスの万分の一位は解消されるはずである。少なくとも、その瞬間は赤ちゃんを愛しいと思えるはずである。そうした行為が、赤ちゃんにとってはヒアリングになるという、一石二鳥のことがおこるのである。さらに言えば、赤ちゃんが一瞬でも絵本を注視していることに気

付けば、それが絵本を媒介にしたコミュニケーションだと感じることもできるのである。

さて、ヒアリングにより認識言語ができあがった幼児は、やがて言葉を発し始める。それは一歳前後と言われている。学生が実習に行っている0才児に関する報告は、「何と言っているのかわからない」という意見も多いが、以下のような記述もある。

- 鳴き声は月齢により違う。
- 要求する時と嫌な時の声は違う
- 月齢の高い子は鸚鵡返しをする。
- 指差して「あっあっ」という。
- こどもがお菓子を欲しいと手を出している時に、保育者が「くださいね」と代弁して言うと、こどもが「あーあ」とまねをするような言葉を発する。(ジャルゴン)
- 「あー」「ねー」「うー」「ママ」「てんてい」「いや」「あい」「わんわん」「にゃんにゃん」といった一語文が出ている子もいる。

3. 一歳スピーキングの開始

0歳代から話し始める幼児。しかし、月齢差と個体差は大きく、初語が出ないということをあまり心配する必要はない。認識言語ができあがっていて、指差し・アイコンタクトが出来ていれば、いずれ初語は出てくる。不思議なことは、初語は名詞と限られるわけではなく、形容詞・形容動詞・副詞・動詞である場合すらある。つまり、言語獲得において文法的法則性は成り立たないわけである。それ故に、人間の言語獲得について多数の研究が成されながらも、未だに解らない部分が多いのである(注⑨)。初語が出た後も、語彙がすぐに増加するわけでもなく、「本当にしゃべることができるのだろうか」という疑問が残るくらい話せない場合も多い。一語文が長々と続く場合もあれば、すぐに二語文になる場合もある。中には、すぐに助詞が付いたり、文の形になっていく場合もある。これもまた、言語獲得の不思議さである。

文法の獲得という複雑な事柄を、体系的な教育もなしに、何故に達成できていくのかという疑問は未だに解決できていない。

おそらく、言葉の出現は、コップに水を満たすように、子どもの中に言葉が一杯になった時にあふれ出す現象だと考えるのが一番正しいだろう。コップが一杯になるのに十ヵ月で十分の子もいれば二年近くを要する子もいるわけである。しかも、それはその後の発達と相関関係があるわけではない。言葉を発するようになると、鸚鵡返しという行為も、断続的に見られるようになる。単に発音を真似するだけの場合と意味をも認識した場合とがある。これもまた不思議なことである。

この時期、絵本は少し内容を持ったものを理解することができるようになってくる。読み聞かせを続けていけば、きちんと聞けるようになってくる。ただし、得意な本とそうでない本があるのは、この時期の特徴である。好きな絵本は喜んで最後まで読み聞かせを聞くことができるが、興味のない本については、二三ページで見なくなる。好きな絵本は飽きることなく、何度も何度も読み聞かせを要求する。『かおかおどんなかお』(こぐま社)『くだもの』(福音館)『だるまさんが』シリーズ(ブロンズ新社)『ねないこだれだ』(せなけいこ・福音館)など簡単な筋立てでリズムのよいものが読み聞かせに利用される。

学生の実習時の報告は以下の通りである。

- 月齢の低い子はたまによくわからない言葉。高い子はおしゃべりな子が多く、鸚鵡返し。
- 動物は「わんわん」。(過拡張的用法)
- 「しえんしえー」「しいーし」と会話のようなことをする子がいる。
- 以下のような言葉が出ている。「ばあ」「わんわん」「おちゃちゃ」「だっこ」「あっち」「いや」「いやだ」「イヤイヤイヤ」「…ねえ」(何をいっているのかわからな

い)「はい」「バイバイバイバイ……」「ま
まー」「ママ来た?」「ママかパパがいい」
「まま(先生のことをたまに)」「ばなな」
(木の柿をみて、しつこく)「ウンボ」「ヒ
コーキ」「だっこ」「ぶーぶー」「まんま」
「いってらっしゃい」「てんてー」「あんば
んまん」「きいろ」「あか」「とったー」(お
もちゃなどをとられて)「～したい」「じぶ
んです」「一人でねれるよ」「～ちゃん
の」「これ食べられると」「あっくるま」

4. 二歳一自己主張の発達

なんでもやることができると自信にあふれた
「誇り高き二歳児」。自己主張が強くなるが、
自分を抑えるということはまだできない。言葉
の使用はまだ未熟で、語彙の数も不足してい
る。したがって日常的に「けんか」が起こるこ
とになる。言語の特徴としては二歳前後に訪れ
る爆発的語彙増加期がある。わずかの間に爆発
的に語彙が増加する。おそらく認識言語の蓄積
が一応終了して言葉が出現し、その使用にある
程度馴れた後に、一気に使用語彙が増加するの
だろう。記憶力の増加とも関連しているのかも
しれない。この時期は「わが子は天才ではなか
ろうか」と錯覚する最初の頃で、そのくらい記
憶力の発達がめざましい。読み聞かせの絵本を
全て覚えてしまうのもこの時期からである。

子どもは絵本を覚えてしまっても読み聞かせ
を願う。それは、覚えてしまった言葉と読み聞
かせとは異質なものだからである。子どもに
とっての絵本は、自分だけでは読むことができ
ない。むろん絵を見ながら楽しむことはでき
るが、それは読み聞かせとは別の次元の楽しみ方
である。読み聞かせは第三者が必要である。子
どもは絵を見る。絵を見ながら耳から言葉が
入ってくる。耳からの言葉に対する理解は厳密
なものではないけれど、目の前の絵をじっくり
と見ながら、耳からの言葉との相乗効果で、頭
の中には想像の画像が動いていく。ここで想像
力というものが養われることになる。絵本の読

み聞かせはコミュニケーションの一つである
とともに、想像力を養成する効果がある。これが
大切な効能である。この時期の絵本は、保育園
での読み聞かせが続いていれば、少し物語的な
ものも理解できるようになる。

学生の実習時の報告。

○自我が強い。普通に会話している。

○先生ごっこで「もう静かにして下さい」「そ
んなにおしゃべりをするならベランダに
行ってください」「そこは座ってはだめ
よ」「○○ちゃん座ってね。じゃあ、絵本
読んでいいですか」と言って手遊びをす
る。「もうちょっと座っていようね」「いい
こね」といったごっこ遊びができるよう
になる。

○「しえんしえー」「自分で」「自分でやる」
「どこにおったの」「ウンボ」「ぴょんぴょ
ん(うさぎ)」「先生大好き」「先生かわい
いね」「○○ちゃんね、きのうどうぶつえ
んいったと」「これはここ」「ごっとたま
でった(ごちそうさまでした)」「どんど
こ(繰り返す。どんどこももんちゃんを
気に入って)」「シー出たよ」「いやー(何
をいっても)」「ごめん(と言える)」「これ
は何」「何で(と聞く)」「がんばったね」
(1歳の弟に)「先生おんぶ」「なんで」
「これかして」「せんせいのおっぱい」「お
いしいよ」「こっちきて」

○間違い言葉「できられん」「きれれん」

○けんかの時「しないで」「ごめんね」「いい
よ」という決まり言葉が使用されるよう
になる。

5. 三歳一抑制行動の発達

発話の遅れていた幼児も話すことができるよ
うになり、日常的なコミュニケーションがとれ
るようになる。運動能力の発達とも相まって、
行動範囲が広がり、言語では語彙も増え、文法
の獲得も進んでいく。様々な場面で語彙の不足

はあるものの、自己の感情を表現しようとする。自己主張だけではなく抑制行動も可能となってくるが、言葉の遅れている幼児に関しては、表現することができないため、コミュニケーション不足となり、周りの幼児と衝突する場面も見られる。コミュニケーションが可能とは言え、まだ自己主張のぶつかり合いというコミュニケーションが中心であり、互いが互いの主張を通し合う平行型である。したがって、幼児の発話を周囲の人間が聞き取って理解してやるという場面が多く、双方向のコミュニケーションが成立しているとは言いがたい。けんかや遊具の譲り合いの決まり文句も二歳児では難しく、三歳児でかなり有効に働くことになる。昨日・今日・明日という時制は理解できるようにはなってくるが、その明確な違いは理解できていない。幼児期特有の、一年前の記憶が突然よみがえり、「昨日、プール楽しかったね」などと一年前の出来事のことを語る発言が生まれたりする。

絵本は『ぐりとぐら』など物語が理解できる年齢である。まだ複雑な物語は無理だが、単純なストーリーについては、無理なく理解することができるようになる。

学生の実習報告では、かなり具体的な言葉が出てきており、感情表現の上手な子どもも見られる。

- 「かんちょう」といつてくる。「おっばい」「おしり」「くそばばあ」「ばかあほ」「はなくそ」「なんやお前みるな」(子供どうしで)など悪い言葉が好き。
- 「なんで」「どうして」「せんせいあそぼう」「もうせんせいとあそばん」「あっちいって」「かみむすんでいい」「かぜひいたと。だいじょうぶ」「いいなあ。ほくもしたいなあ」「葉っぱの雨がふってきた」(落ち葉)「だって……だもん」
- 「はやくしなさい」と先生の口癖を真似る。先生の気をひこうと何度も先生の名前を呼

ぶ。

- 「今日、先生、ぼくのおうちに あそびにきていいよ。おもちゃいっぱいあるけん。」
- 昼寝の時に「おれ先生好き。なおもりも好き」
- 最後の時に、「先生今日で最後?」「どこに行くの」「今日ではいはい?」「おれ、先生がおらんといいい子にできん」
- ブランコ順番待ちの決まり言葉「1……10 おまけのおまけの汽車ぼっぼ、ぼーっとなったら変わりましたよ。ぼっぼー」

6. 四歳一言葉遊びの発生

四歳になると、話の筋が通ってきて、単純な内容なら子ども同士の会話が展開し出すようになる。前言語期の始まりで、言葉が音の集合により成り立っているということが理解できるようになり、しりとり遊びなどの言葉遊びが可能になる。言葉遊びはこの頃から始まり、五歳児で大きく展開することになる。文字を読むという行動も、発達の早い子どもには見られるようになる。色や数字も明確に認識できるようになる。言語に関しては男よりも女の方が発達が早い傾向があるが、数字に関しては男の方が認識が早いようである。色の認識も他の言語の認識とは発達段階が違うようである。言語の発達が早い子どもでも色の認識が遅い場合もみられる。

絵本は色々なものを聞くことができるようになり、絵のない素話を聞くことも可能となる。少し複雑な筋立ての長い絵本を聞くこともできるようになる。

実習生の報告では、言語の発達が認められるが、同時にトラブルに関する言語も報告されている。

- 女の子は大人びた口調。男の子は暴言をまくことがあった。人をばかにする言葉が好き。
- 「きさま」「おまえ」「おしり、おっばい」

「呼び捨てすんな」(叩いて相手は泣いた)「チビ」「デブ」「キモイ」(何にでも)
「おまえ給食もってこい」(実習生に)
「どっか行け」「殺してやる」(けんかの時)

- 「……ちゃんが叩いた」「……ちゃんが嘘ついた」「……ちゃんが……」
- 雨が降っていて外で遊べないと悲しそうにしていた子に「ずっとお天気よかったから、お砂さんのどがかわいてたんだね。また明日晴れたらいっぱいあそぼうね」と言葉掛けすると「雨食べれるもんね」と言って笑顔になった。
- 3歳の女の子に「お姉さんがやっちゃろうか」。一歳の子に「……ちゃんかわいいね」。「ゆずった人がおにいさんよ」(おもちゃの取り合いをしている別の子どもたちに)
- 「うさぎさんね、ゆうかちゃんと先生と絵本読んで遊びたいって」「ぼくのあかちゃんね、かわいいとよ」「かけっこしよー」「おにごっこしよー」「ムシキングしつとう」「マジレンジャーって何人と思う」「先生知ってる?」「先生できる?」「……してあげようか」

7. 五歳一話し言葉の完成・書き言葉への導入

語彙が増え、文法の獲得はほぼ完成する。コミュニケーション能力はかなり発達し、子ども同士で相談するということが可能となっていく。とはいえ、まだ互いに言葉を受け止めて投げ返していくという段階に入っている子どもは少なく、本格的コミュニケーションは就学後だと認識すべきである。就学後のコミュニケーショントレーニングが現在必要とされている。前言語意識も発達し、言葉遊びがさかんになる。文字を読む子どもも増え、一部の子どもの間では手紙のやりとりが始まり、文字を書くということへの興味が生まれる時期でもある。

絵本はどのようなものでも読み聞かせるこ

とができるようになるし、一部の子どもは、たどたどしいながらも自分で読むということも可能となる。絵のない素話はもちろん聞くことができるし、少し難しい昔話なども聞くことができるようになる。

学生の実習報告では、発達した言語活動が出てきているが、悪い言葉もまた多くなっている。あだなをつけるという行為も報告されている。

- おもしろがって、「バカアホ姉ちゃん」「どろぼう」。「おっぱい」。「死ぬ」(おこられていた)。命令口調で「おまえ」トラブルになった。「殺す」「うざい」「かせ」「やめろ」「するな」
- 「○○がね～した。ぼく～て言ったのに」「ぼく悪くない」「～してください」「～してもいいですか」
- 多いことを「無限だよ」。「赤ちゃん」(とおんぶをしてもらっている友達をからかうが、自分たちもしてほしい)。「ぼくんちね、おとうさんがおるとよ」「お花のど渴いとるけん、いっぱいあげた」別れの時に「なんだか涙が出てきた」
- 決まり言葉で「はいわかりました」「はいそうです」「知っています」「違います」

8. おわりに

以上のように言葉の発達と絵本についての心覚えをまとめてみた。今後はこれらを検証するとともに、現在福岡市東区の保育士会の人たちと行なっている絵本研修の成果をまとめ、発達と絵本に関するさらなる研究を進めていく予定である。

注

- ①『胎内記憶』池川明 角川SSC新書 2008年
- ②『言語発達と言語発達支援』『言語発達とその支援』シリーズ臨床発達心理学4 ミネルヴァ書房 2002年他

- ③『子どもたちの言語獲得』小林春美・佐々木正人編
大修館書店 1997年
- ④『赤ちゃんの認識世界』ことばと心の発達第1集
正高信男編 ミネルヴァ書房 1999年
- ⑤『0歳児がことばを獲得するとき』正高信男 中公
新書 1993年
- ⑥『赤ちゃん学を知っていますか』産経新聞「新・赤
ちゃん学」取材班 新潮文庫 2006年
- ⑦『子どもたちの言語獲得』
- ⑧『日本の幼児の成長・発達に関する総合調査』村山
貞雄編 サンマーク出版 1987年
- ⑨『幼児語彙の統合的発達の研究』前田富祺・前田紀
代子 武蔵野書院 1996年、『子供は言語をどう獲
得するのか』スーザン・H・フォスター＝コーエン
今井邦彦訳 岩波書店 2001年、他。